

ごあいさつ

「まぶさび」という造語を思いついたのは、「さび」、「ひえさび」、「きれいさび」などと、日本文化を通じて提示されてきた美的理念の数々を想起しながら、現代ではどうだろうと、漠然と考えていたおりのことでした。晴れた日の妙に明るい庭を見ていたことも手伝ってか、「まぶさび」という語が、思わず浮かんだのです。1990年前後のことでした。以後、この語を気にしながら、あれこれと調べていくうち、しだいに確信がもてるようになったのです。19世紀後半以降、透明素材と反射・反映素材がまわりに増えていき、それとともに、一方では「すきとおり」に対する美的感性が、もう一方では「まばゆさ」に対する美的感性が、洗練されていったことを。

「まぶさび」とは、そのような現代的感性を、あくまで「さび」の心で受けとめようとするものです。1998年に「まぶさび庵」と自称し始めて以来、さまざまなかたちで、そのような思いを表現し、伝えようとしてきました。考えてみれば、聞きなれない造語にもとづく活動など、相手にされなくて当然とも思われるのに、各新聞紙、いくつかの雑誌、出版社、ギャラリーや美術館などが、つぎつぎに機会を与えてくれました。このたびの展覧会に当たっても、京都大学総合博物館や人間・環境学研究科の多くの方たちにご尽力いただきました。また、京都市と長浜市には共催というかたちで支援していただいております。「まぶさび」の心で、深甚の感謝の思いを捧げる次第です。

篠原資明

趣 旨

「まぶさび」とは、「まぶしさ」と「さびしさ」を掛けあわせた造語であり、新しい風雅の理念「風雅モダン」を示すものとして、20世紀末から篠原資明により提唱されてきました。19世紀後半から今日にいたるまで、数多くの透明素材と反射・反映素材が開発されてきましたが、それとともに、「すきとおり」と「まばゆさ」への美的感性も育まれてきたように思われます。「まぶさび」とは、そういった美的感性を「さび」の心で受けとめようとするものです。

篠原は、そのような「まぶさび」の理念を、芸術の理論的・歴史的研究、著作活動、展覧会の企画、方法詩の創作などをおして、追究してきました。また、「まぶさびの滝」マークを自らデザインし、自身のホームページや展覧会などに用いるなど、広く周知はかってきました。今回の展覧会は、そうした理論と実践を、あらためて創造的かつ総合的なかたちで提示しようとするものです。

展示は、おもにつぎの四つのテーマに分けて行われます。

- ① 「さび」と日本の美意識の、ひとつの源流である藤原定家による百人一首の「まぶさび」的とらえ直し。
- ② 小堀遠州に代表される「きれいさび」の世界の「まぶさび」的とらえ直し。
- ③ 20世紀以後のアート、デザイン、文学の「まぶさび」的とらえ直し。
- ④ 方法詩の作品と歴史の提示。

1

《まぶさび鏡》と《定家流れつぐ滝》

2点の《まぶさび鏡》は、2005年に制作され、同年、「言ノ葉ノかげ」展（京都芸術センター）に出品されました。《まぶさび鏡1》にはアクリル・ミラー、《まぶさび鏡2》にはアクリル・ガラスが用いられています。展覧会に際しては、《まぶさび鏡2》が南側に、《まぶさび鏡1》が北側に設置されることになっています。それは、月が南からガラスをとおしてさしこみ、さらにそれを北側のミラーが増殖させる光景を、想いえがいてほしいからです。

《定家流れつぐ滝》は、これまで「百人一滝」展（錦織車庫、大津市、2004年）と「言ノ葉ノかげ」展において、それぞれ別様のインスタレーションとして展示されてきました。今回は、「百人一滝」展出品の《まぶさび花ムベ》の一部をあわせ用いた拡大版インスタレーションとなります。加工された超絶短詩集『百人一滝』（七月堂、2003年）が使われていますが、そのタイトル部分はすべてくりぬかれて、同じインスタレーションの別の箇所にてたてられています。滝のように、そして墓標のように。



定家流れつぐ滝



2

《定家宛て百人一滝》

《定家宛て百人一滝》は、部分的には、「百人一滝」展と「言ノ葉ノかけ」展に出品されていましたが、今回は、《百人一滝カルタ》（京都芸術センター製作、2005年）と組みあわせ、全百点をはじめて展示します。

この作品は基本的に、もとになった超絶短詩集『百人一滝』と同様、百人一首の和歌を一首ずつ超絶短詩により編み分けすることで作られています。細かくいえば、つぎのとおりです。

- ① 超絶短詩は、横一行に一篇ずつ並べていく。
- ② 各超絶短詩の隙間が、縦にそろうよう配置し、縦の空白により、滝を象形する。
- ③ 下に元の歌を、大きく隙間をあけて配置し、一番下の行で隙間を閉じ、それでできる空白により滝壺を象形する。



定家宛て百人一滝



3

方法詩

篠原は1990年代初頭から、自ら提唱した方法詩により詩作をおこなっています。方法詩とは、新たな型を創案し、それに即して詩作するタイプの詩で、既成の型による定型詩とも、行き当たりばったりで詩作する偶成詩（いわゆる自由詩）とも異なる、第三の道として提唱されました。方法詩は、中ザワヒデキ、松井茂、足立智美、三輪眞弘による方法芸術運動（2000～2004年）に影響を与えるなど、大きな反響を呼びました。制作・刊行された詩集は、主なものを挙げれば、つぎのとおりです。

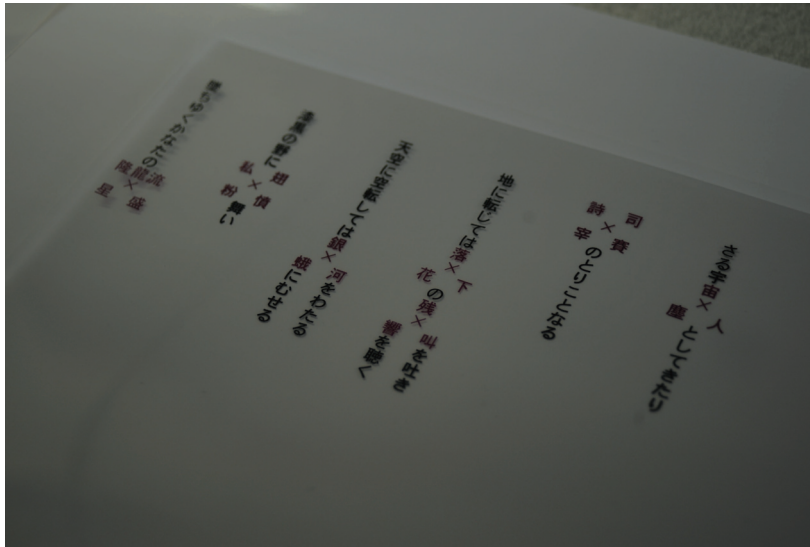
『サイ遊記』思潮社、1992年

『滝の書』思潮社、1995年

『平安にしずく』思潮社、1997年

『崩楽』私家版、2004年

『空うみのあいだ』思潮社、2009年



「悟空の墓」より

4

超絶短詩

超絶短詩とは、方法詩の一環として1990年代初頭から試みられている詩型で、基本は、つぎの規則によります。

- ① 語句を二つに分解する。
- ② 分解された後の語句の、少なくともいずれかが、擬音語と擬態語を含む広義の間投詞であること。

超絶短詩集として刊行されたものは、つぎのとおり数多いが、透明素材や反射素材を用いた超絶短詩オブジェも制作しています。

『物騒ぎ』 七月堂、1996年

『水もの』 七月堂、1996年

『桃数寄』 七月堂、1998年

『摘み分け源氏』 七月堂、1999年

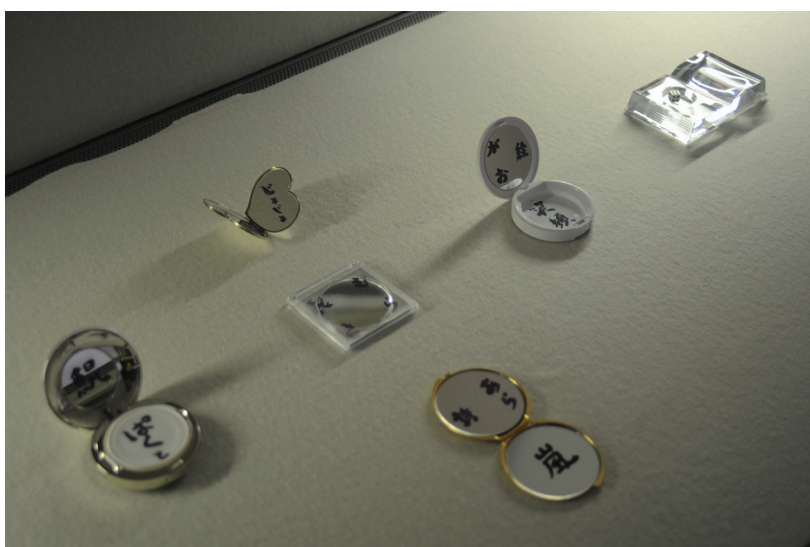
『玉枝折り』 七月堂、2002年

『百人一滝』 七月堂、2003年

『星しぶき』 七月堂、2007年



超絶短詩オブジェ「サイコロ」



超絶短詩オブジェ

5

『崩楽』

まぶさび的な詩集制作への思いに駆られた篠原は、6枚の透明シートによる『崩楽』（私家版、2004年）を刊行するにいたりました。方法詩としての規則は、つぎのとおりです。

- ① 下底部に□ないしは類似の形をもつ漢字を選び、その形を滝壺に見立てた一行詩を作る。
- ② 滝見立ての一行に用いる文字および記号は、当漢字とひらがなを除けば、当漢字の□形以外の部分ないしは形に限る。

この詩集は、思わぬところで反響を呼びました。作曲家、鶴見幸代により合唱曲集「崩楽」（2005年）として、生まれ変わったのです。この合唱曲は、東京で2度演奏されました。会場でお聴きいただくのは、作曲を委嘱した田中信昭指揮、創る会による初演版です。

6

まぶさび系展覧会

篠原は、自ら制作・出品するだけでなく、他の作家とコラボレーション（共同制作）したり、展覧会を企画したりしてきました。1980年代から関係した展覧会は数えきれないほどですが、「まぶさび」を自覚して以後の展覧会は、つぎのとおりです。

「融点・詩と彫刻による」うらわ美術館、2002-2003年

「ムラサキまぶさび」セゾン現代美術館、軽井沢、2003年

「百人一滝」京阪電鉄・錦織車庫、大津、2004年

「言ノ葉ノかげ、二人の詩人の二つの美術」京都芸術センター、2005年

「アートまぶさび」ギャラリー16、京都、2009年

「遠州まぶさび」四居家展示ギャラリー、長浜、2009年

7

まぶさび掛軸

透明素材と反射・反映素材、色としては無彩色以外には紫しか使わないのが、まぶさび流です。それにより、2種類の掛軸（オブジェ付きもあり）を作ってみました。ひとつは、まぶさび茶一具《よんでみた、のんでみた、ひかるたき》、いまひとつは、20世紀の作家それぞれに捧げる4幅です。後者では、E・サティ（1866～1925年）、M・デュシャン（1887～1968年）、倉俣史朗（1934～1991年）、稲垣足穂（1900～1977年）を選んで、それぞれのイニシャルも含め、ゆかりの文字や言葉を組みこんだ軸物に仕立ててみました。茶室めいた場所で、こういった掛軸を見ながら、それぞれの作家談義に花を咲かせる鍵をちりばめたつもりなので、ちょっとした謎解きのつもりで、見ていただければと思います。



20世紀の作家に捧げる4幅

タルホ訪うて、星たちの、ふうわりと — 稲垣足穂に



これは泉ではない滝 — デュシャンに



花びらの滝しぶき — 倉俣史朗に



花びらの滝しぶき — 倉俣史朗に（部分）



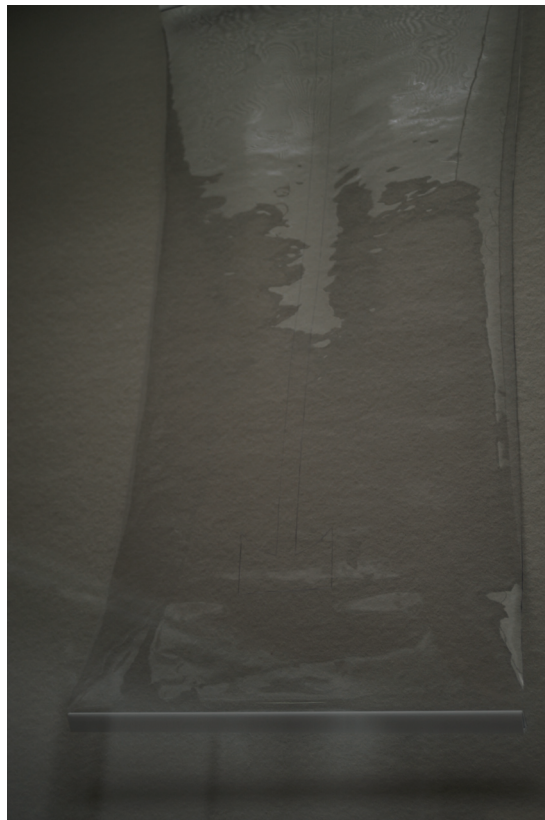
チャオ！ サティ



チャオ！ サティ（部分）



よんでみた、のんでみた、ひかるたき（まぶさび茶一具）



よんでみた、のんでみた、ひかるたき（まぶさび茶一具）より

8

《遠州もいく我もいく》

16世紀から17世紀にかけて生きた小堀遠州は、茶人、建築家、作庭家として活躍したスーパーアーティストでした。その「きれいさび」の世界は、茶道具から大徳寺孤篷庵、二条城庭園、さらには桂離宮にいたるまで、残されています。その世界を「まぶさび」的にとらえ直したいとの思いから、遠州生誕の地、長浜市で「遠州まぶさび」展（2009年）を開きました。インスタレーション《遠州もいく我もいく》は、そのとき

展示されたマブサビット（まぶさび流制作協力者）たちの作品に、篠原の作品を加え、再構成したものです。主につぎの4点を使用しました。孤篷庵の延段の形に触発された《水面石》（山内朋樹）、同じく孤篷庵の延段の道とローマのアップピア街道の道を交差させた《共鳴のなりたち／RISONANZA》（田口かおり）、遠州による「夢」を含む和歌をシンデレラのガラスの靴に封じこめた《シンデレラが遠州をたずねたとせよ》（佐藤有香＋瀬良万葉）、孤篷庵の手水鉢「布泉」に触発されたオブジェ《布泉にしづく》（篠原）です。「布泉」とは「布銭」をしゃれたもの。そこで今度は逆に、布泉を「ふ 銭」と超絶短詩でしゃれ返してみると。そのような発想からできたオブジェです。



9

まぶさび流きれいさび

遠州ゆかりの掛軸を2幅、まぶさび流で作ってみました。《忘筌にしずく》と《孤篷にしずく》です。

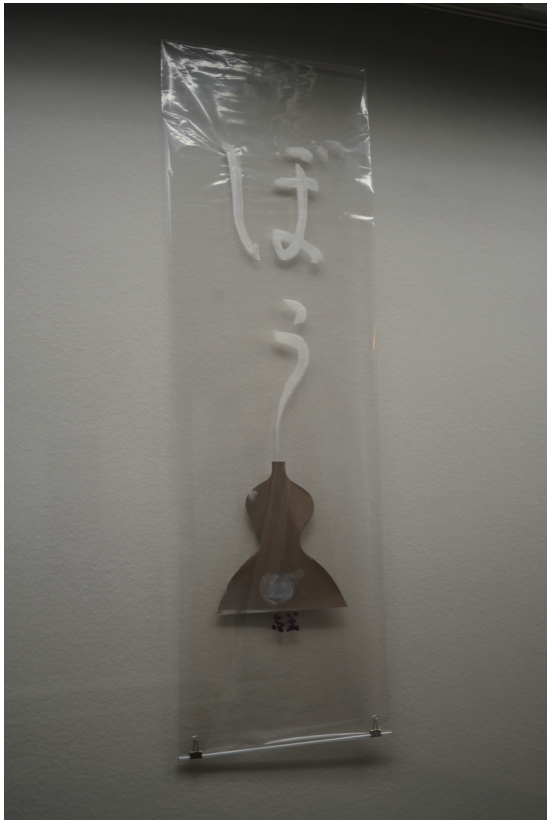
《忘筌にしずく》は、孤篷庵の茶室「忘筌」から着想されました。忘筌からできた超絶短詩が「ぼう 栓」。瓢箪の形は、遠州が瓢箪型を好んだということもあっての取り合わせです。「きれいさび」には言葉遊びも含まれていますから、そういったことも、遠

州なら許してくれるでしょう。

《孤篷にしずく》では、孤篷庵の延段を崖に見立ててみました。孤篷の篷とは、舟を意味します。そういったところから、イメージをふくらませてみました。孤篷からできた超絶短詩が「孤歩 う」。孤独な舟と、ひとりぼっちの歩み。どちらも、さびしさに通じます。さびしさ、それこそ「さび」のひとつの源泉にはかなりません。



まぶさび流きれいさび二幅



忘筌にしずく



孤篷にしずく



「百人二滝」朗読パフォーマンス



朗読パフォーマンス司会



まぶさび展会場風景



言ノ葉ノ香（宮崎薫十 篠原資明）